

蜘蛛流大工棟梁横田氏の手挟・持送絵様について

横田家大工文書の研究 (9)

Consideration on the Design Style of “Tabasami and Mochiokuri” made by the Yokota Family, the Master Builder of Kumo School

白井裕泰*

Hiroyasu Shirai

要約

横田氏が用いた手挟・持送の絵様は、資料数が少なく、その変遷を明らかにすることはできなかったが、公刊された木割書における手挟・持送とかなり類似していることがわかった。すなわち横田氏の手挟・持送絵様には独自のデザインはほとんどみられず、公刊された木割書を参照して手挟・持送をデザインした可能性があるといえよう。

キーワード：蜘蛛流、大工棟梁、横田氏、持送、手挟、絵様

*住居学科

目 次

- I はじめに
- II 木割書における手挟・持送絵様
 - 1.1 手挟絵様の分類
 - 1.2 手挟絵様の変遷
 - 2.1 持送絵様の分類
 - 2.2 持送絵様の変遷
- III 横田氏の建築作品にみる手挟・持送絵様
 - 1.1 手挟絵様の変遷
 - 1.2 横田氏の手挟と木割書における手挟との比較
 - 2.1 持送絵様の変遷
 - 2.2 横田氏の持送と木割書における持送との比較
- IV 横田家大工文書にみる手挟・持送絵様
- V おわりに

I はじめに

横田氏は、東北地方において蜘蛛流と呼ばれる大工集団を形成し、江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産を行った大工棟梁である。

本研究は、「蜘蛛流大工棟梁横田氏の絵様について」⁽¹⁾の一連の分析に引き続き行うものであり、本論文は蜘蛛流大工棟梁横田氏が建築した作品にみられる手挟・持送絵様の変遷を体系的に把握することを目的としている。

また横田家大工文書の中で手挟・持送絵様図を基本資料として取り上げ、横田氏の建築作品における手挟・持送絵様と比較することによって、名称不明の絵様図がどの建築作品に用いられたかを特定できることを期待している。

さらには近世に公刊された木割書における手挟・持送絵様と比較することによって、横田氏の手挟・持送絵様の特徴を明らかにする。

II 木割書における手挟・持送絵様

横田氏の絵様を分析するにあたって、ここでは手挟・持送絵様を取り上げることにするが、江戸時代の代表的な木割書として須原屋茂兵衛蔵版の大工雛形書があり、その中で絵様を取り扱われているものとして表1のようなものがある⁽²⁾。ただし『大工絵様雑工雛形』は岐阜屋（正文堂）清七が版元であるが、参考資料としてここにあげておく。

表1 近世における主な大工雛形書

No.	絵様雛形書名	著者名	刊行年	備考
1	大匠雛形 彫物絵本	鈴木重春	正徳4年(1714)	全5冊の内2冊
2	匠家絵様集	官匠廣丹晨父	宝暦9年(1759)	全2冊
3	新撰雛形 五 絵様	木暮甚七	宝暦9年(1759)	全5冊の内1冊
4	大和絵様集	立川小兵衛	宝暦13年(1763)	全4冊
5	彫工雛形	二柳先生	文政10年(1827)	全1冊
6	当世いろは絵様集	奴長兵衛	天保5年(1834)	全2冊
7	大工絵様雑工雛形	落合大賀範国	嘉永3年(1850)	全2冊

ところで、麓和善氏他は「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」⁽³⁾において、手挟・持送絵様の変遷過程について次のように指摘している。

ロ 持送

初期の史料では、宝暦9年刊の『秘伝 匠家絵様集』に単純な渦文や線形のもものが若干見える程度である。しかし文政10年刊『彫工雛形』以後は多くの史料に見えるようになり、その絵様はほとんど木鼻と同様である。ただし、嘉永3年刊の『新刻 大工雛形』において、早くも天象と動物の組み合わせになるものが見える。

ト 手挟

初期の史料にはあまり記されておらず、わずかに渦文のもものが三例あるに過ぎない。天保5年刊の『いろは絵様』では、渦の一部に若葉が付いた単純なものから、渦全体雲・植物のもの、さらには手挟全体が雲・植物のものまで、多種の手挟が記されているが、それ以前の変遷過程については、絵様雛形のうえからは確認することができない。

すなわち、近世木版本彫物書における手挟絵様は『当世いろは絵様』(天保5・1834年)において渦文若葉、雲・植物、波・雲など多様なものがあられ、以後変化はみられない。また持送絵様は『彫工雛形』(文政10・1827年)以後ほとんど木鼻と同様の変化がみられる。

以上の指摘を踏まえて、各大工雛形における手挟・持送の絵様をみることにする。その特徴を簡単にまとめたのが、表2.1・2である。

1.1 手挟絵様の分類

木割書における手挟を分類するには、手挟の様式(意匠およびその主題)から行うことが適当である。手挟は向拝柱上の三斗組実肘木上に載り、軒に接して、軒桁に取り付くものであるから、手挟の位置によって分類することはできない。

手挟の形態をみると、向拝柱上奥行方向の実肘木と化粧垂木の二辺によって形成される三角形を基本とし、軒桁内側の形態に多様性がみられる。しかしながらその形態は、基本的には木鼻様のもので、意匠および主題によって抽象的な絵様・線形、天象系の渦・波頭・

表 2.1 木割書における手挟絵様

No.	絵様雛形書名	刊行年	手挟絵様	備考
1	大匠雛形	正徳4・1714年	線形	
2			渦文	
3	匠家絵様集	宝暦9・1759年	渦文	
4			渦文	
5	当世いろは絵様集	天保5・1834年	渦若葉	
6			渦文若葉	
7			渦文渦若葉	
8			波頭	
9			雲水	
10			流水と雲	

表 2.2 木割書における持送絵様

No.	絵様雛形書名	刊行年	持送位置	持送絵様	備考
1	大匠雛形	正徳4・1714年	肘木下	線形	
2	匠家絵様集	宝暦9・1759年	肘木下	線形	
3			肘木下	線形	
4			肘木下	渦文	
5	大和絵様集	宝暦13・1763年	肘木下	渦文若葉	
6	彫工雛形	文政10・1827年	虹梁下	波頭	
7			虹梁下	波頭	
8			虹梁下	雲水	
9			虹梁下	菊花	
10			虹梁下	松	
11			肘木下	流水・波頭	
12			肘木下	渦菊花	
13			肘木下	渦文若葉	
14			肘木下	流水・波頭	
15			肘木下	雲竜	
16	当世いろは絵様集	天保5・1834年	肘木下	渦文渦若葉	堅持送
17			肘木下	渦若葉	
18			肘木下	渦若葉	
19			肘木下	渦文渦若葉	
20			肘木下	渦文渦若葉	手臂木持送
21			肘木下	渦若葉	
22			肘木下	渦若葉	
23			肘木下	流水・波頭	手肘木
24	大工絵様雑工雛形	嘉永3・1850年	肘木下	渦若葉	横持送之割
25			肘木下	菊水	菊水之持送
26			肘木下	渦若葉	堅持送之割
27			肘木下	波千鳥	浪千鳥之図

表注：持送位置として腕木下、板下も肘木下と考えた。

流水・雲水など、折衷系の渦文若葉・渦若葉などに分類される。

手挟は木鼻と類似した性格をもつが、木鼻における動物系の象・獅子・龍・猿・麒麟・

大匠雛形（正徳4・1714年）



図 1.1

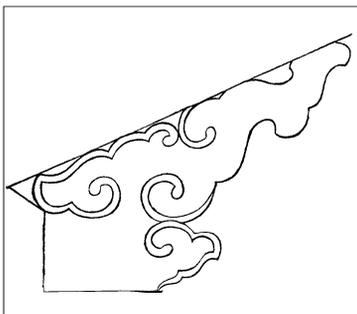


図 1.2

匠家絵様集（宝暦9・1759年）

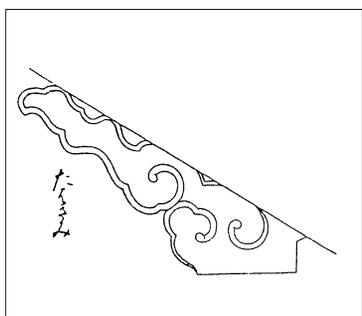


図 1.3

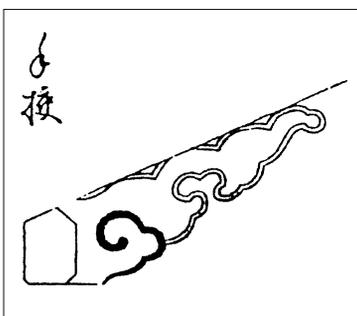


図 1.4

当世いろは絵様集（天保5・1834年）

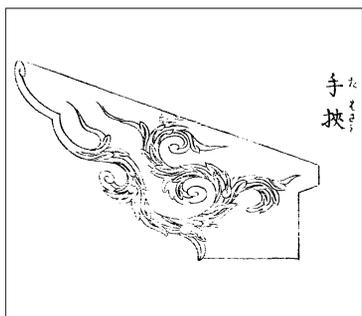


図 1.5

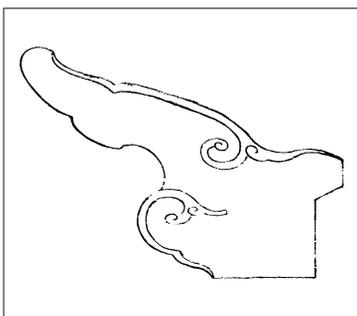


図 1.6

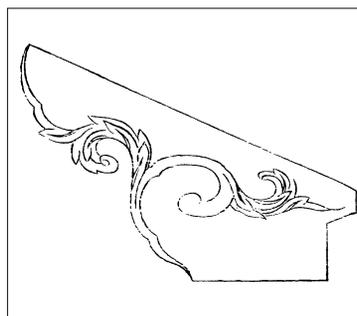


図 1.7

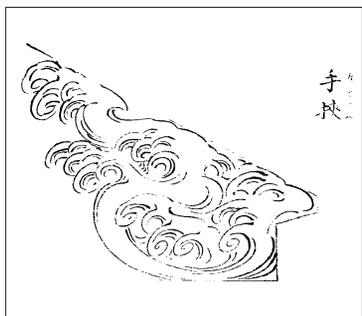


図 1.8

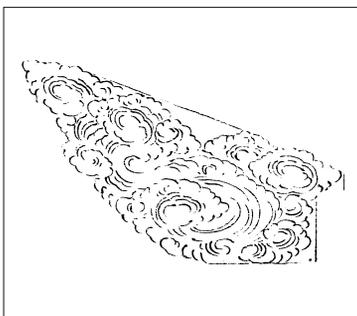


図 1.9

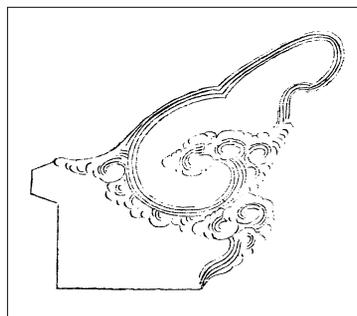


図 1.10

大匠雛形 (正徳4・1714年)

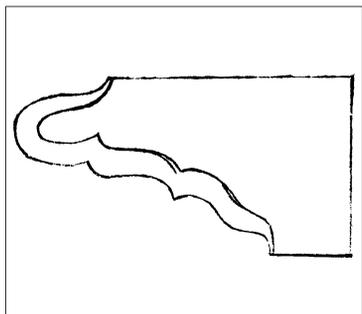


図 2.1

匠家絵様集 (宝暦9・1759年)

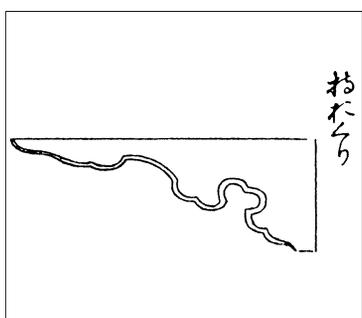


図 2.2

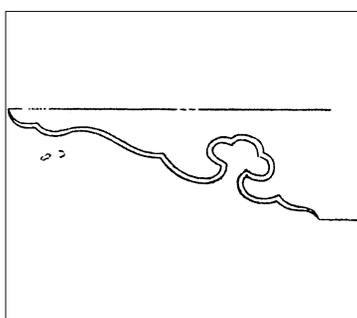


図 2.3

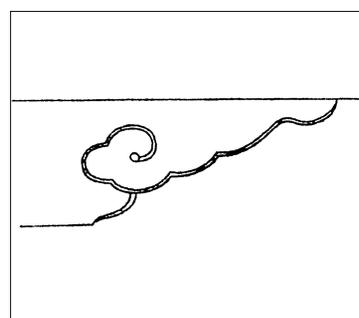


図 2.4

大和絵様集 (宝暦13・1763年)

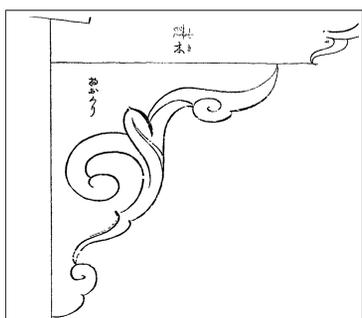


図 2.5

彫工雛形 (文政10・1827年)

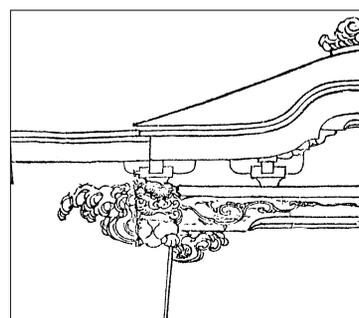


図 2.6

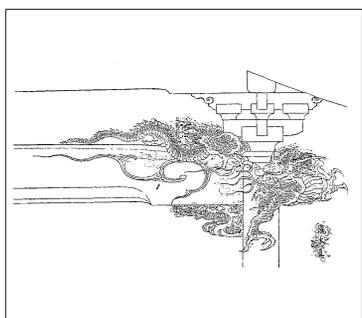


図 2.7

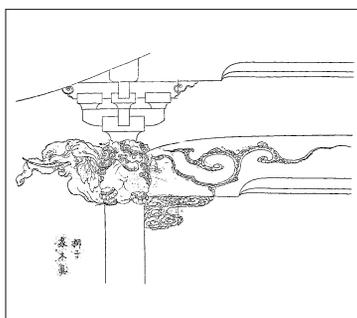


図 2.8

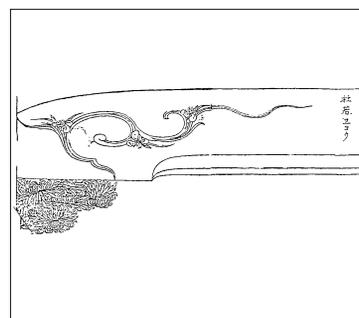


図 2.9

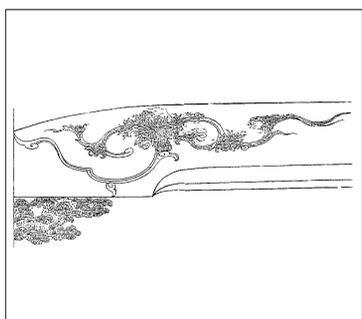


図 2.10



図 2.11

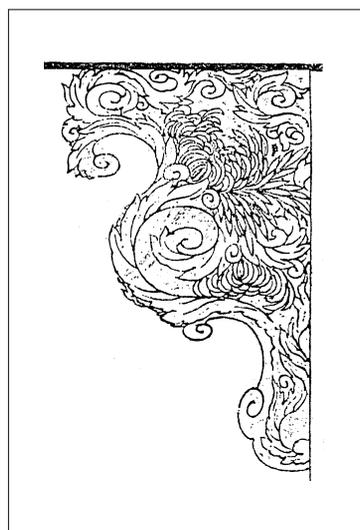


図 2.12

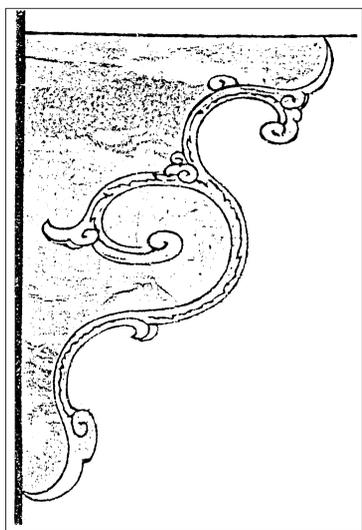


図 2.13

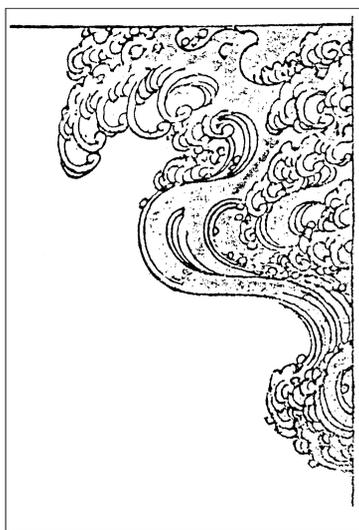


図 2.14

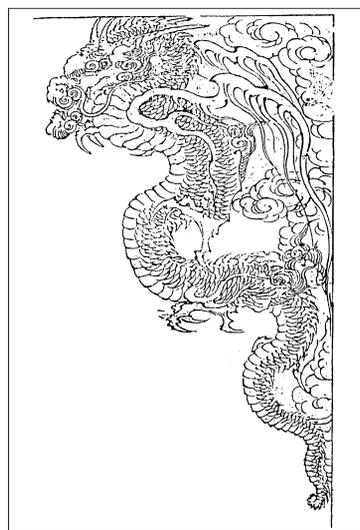


図 2.15

当世いろは絵様集 (天保5・1834年)

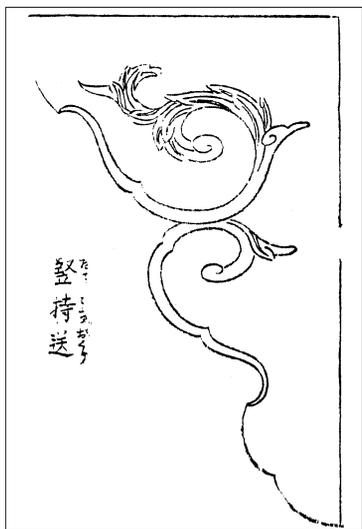


図 2.16

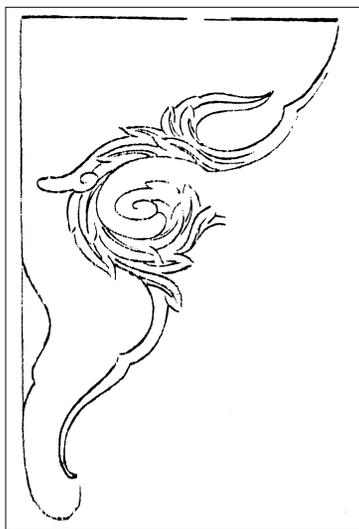


図 2.17

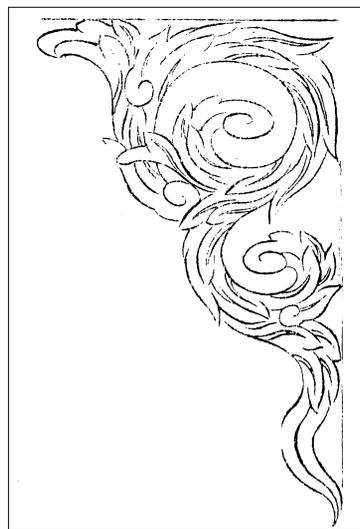


図 2.18

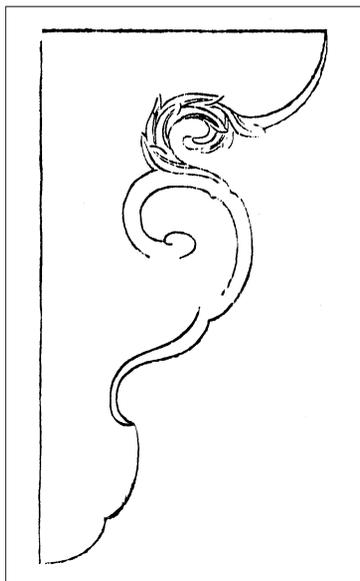


図 2.19

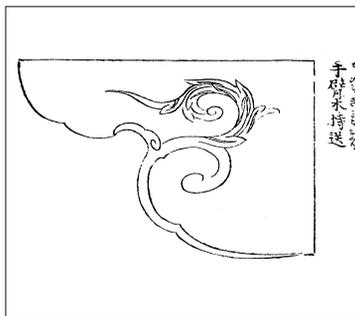


図 2.20

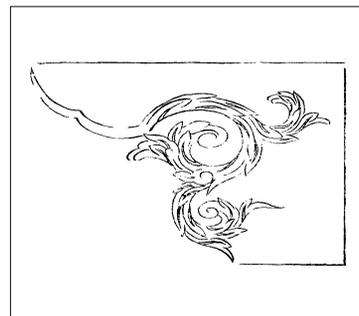


図 2.21

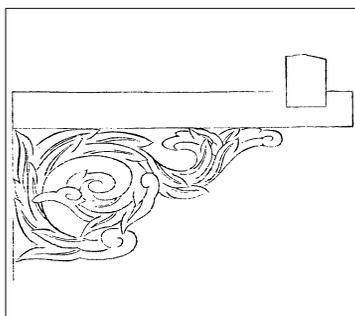


図 2.22

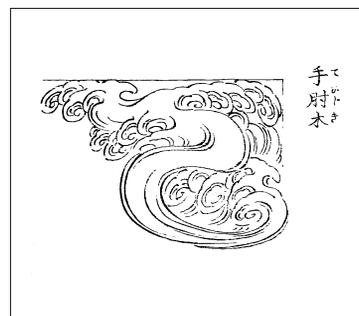


図 2.23

大工絵様雑工雛形 (嘉永3・1850年)

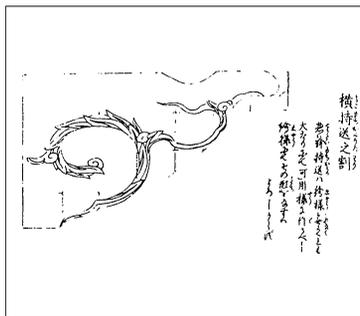


図 2.24



図 2.25

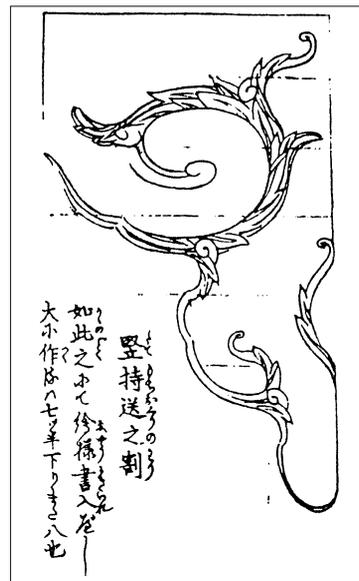


図 2.26

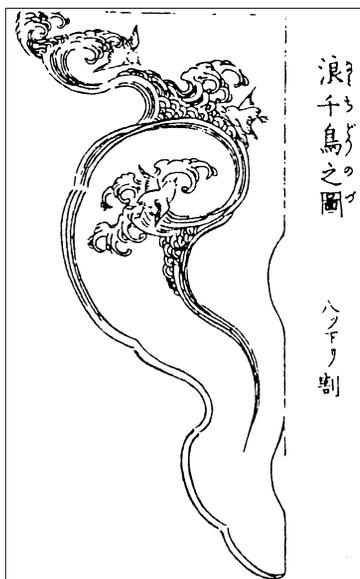


図 2.27

寅・鳳凰・千鳥・鯉や植物系の牡丹・菊・水仙などの例はみられなかった。ただし『新刻大工雛形』（嘉永元・1848年）には植物系の牡丹・菊がみられる。すなわち手挟絵様は木鼻絵様ほどの多様性はないといえよう。

また手挟には象・獅子・龍・獏・麒麟・寅などの木鼻にみられるような丸彫のものはなく、平彫のものが一般的である。ただし波頭や雲水の手挟のように、基本的には平彫であるが、丸彫に近く彫刻されているものもある。

1.2 手挟絵様の変遷

木割書における木鼻絵様は65例あったが、手挟絵様はわずか10例にすぎない。このように少ない例をもとに絵様の変遷を明らかにすることは困難であるといえよう。

『大匠雛形』（正徳4・1714年）では、線形、渦文、『匠家絵様集』（宝暦9・1759年）では、渦文、『当世いろは絵様集』（天保5・1834年）では渦文、渦若葉、波頭、雲水など多様性に富んでいる。

このことから判断すれば、手挟絵様の変遷は、線形→渦文→渦文若葉→渦若葉・波頭・流水・雲水という流れが読み取れる。一つの傾向として、手挟絵様の変遷は木鼻絵様と同様の変遷があったと考えられる。

2.1 持送絵様の分類

木割書における持送を分類するには、持送が取り付く位置と持送の様式（意匠およびその主題）にわけて考えなければならない。

持送の位置をみると、虹梁下、肘木下、腕木下、棚板下、隅木下などがある。虹梁下としては向拝水引虹梁、内外陣境虹梁下が具体的に想定され、また縁を支える肘木下、門または扉の腕木下、神棚の板下、隅木下に持送が用いられている。持送の形態をみると、おおよその傾向として、虹梁下、隅木下には横長の「横持送」、肘木下、腕木下、棚板下には縦長の「豎持送」が用いられている。

持送の意匠および主題は、抽象的な絵様、植物系の菊・松、天象系の渦・波頭・雲水・折衷系の渦若葉・渦菊葉・菊水・波千鳥などに分類され、その性格は木鼻絵様とよく似ている。また木鼻絵様にみられるように丸彫のものはなく、平彫のものが一般的である。ただし波頭・雲水の持送は、基本的には平彫であるにもかかわらず、丸彫に近く彫刻されている。

2.2 持送絵様の変遷

木割書における木鼻絵様は65例あったが、持送絵様はわずかに27例にすぎない。このように少ない例から絵様の変遷を明らかにすることは、手挟と同様に困難であるといわざ

るを得ない。

『大匠雛形』(正徳4・1714年)では線形、『匠家絵様集』(宝暦9・1759年)では線形・渦文、『大和絵様集』(宝暦13・1763年)では渦文若葉、『彫工雛形』(文政10・1827年)では渦若葉・波頭・雲水・菊花・渦菊花・松・雲竜、『当世いろは絵様集』(天保5・1834年)では渦若葉・流水・波頭、『雑工雛形』(嘉永3・1850年)では渦若葉・菊花・波千鳥などがみられる。これを概観すれば、線形→渦文→渦文若葉→渦若葉・波頭・雲水・菊花・松・雲竜と変遷したことが読み取れ、手挟と同じく一つの傾向として木鼻絵様と同様の変遷が認められる。

またここでは渦若葉が『当世いろは絵様集』において、すなわち天保年間に主流であったことが注目される。

III 横田氏の建築作品にみる手挟・持送絵様

横田氏の建築作品にみられる手挟絵様の特徴をまとめたのが、表3.1であり、持送絵様の特徴をまとめたのが表3.2である。

表3.1 横田氏の建築作品にみる手挟絵様

No.	建 物 名	建 築 年 代	手 挟 絵 様	備 考
1	貝谷観音堂	延享4・1747年	入八双・牡丹	
2	正学院浮金観音堂	天保5・1814年	渦文若葉	
3	蛇内観音堂	嘉永4・1851年	線形	
4	飯豊神社拝殿	嘉永5・1852年	牡丹	籠彫
5	鹿島神社拝殿	明治15・1882年	渦若葉	
6	熊倉神社拝殿	明治21・1888年	渦・波頭	神社所蔵図面

表3.2 横田氏の建築作品にみる持送絵様

No.	建 物 名	建 築 年 代	持 送 位 置	持 送 絵 様	備 考
1	宝蔵寺客殿	安永9・1780年	虹梁下	渦文	
2	湯沢神社本殿	寛政9・1797年	縁下	渦文	
3	満福寺鐘楼	万延2・1861年	隅木下	渦文若葉	
4	蛭沢稻荷神社拝殿	明治31・1898年	虹梁下	松	籠彫

横田氏が手掛けた建築作品にみられる手挟絵様について詳細にみると以下のようなになる。

① 貝谷観音堂(延享4・1747年) 図3.1 参照

この手挟は、向拝柱上の出三斗組物の実肘木上にあり、軒桁裏面に取り付き、化粧垂木と接している。軒桁側の手挟元は入八双・猪目の意匠となっていて、手挟末側は牡丹の花

と葉でデザインされている。

② 正学院浮金観音堂（天保5・1834年）図3.2参照

この手挟は、向拝柱上の出三斗組物の実肘木上にあり、軒桁裏面に取り付き、化粧垂木を挟み込んでいる。手挟末側は渦文若葉となっていて、向拝水引虹梁の意匠と類似している。

③ 蛇内観音堂（天保9・1838年）図3.3参照

この手挟は、向拝柱上の出三斗組物の実肘木上にあり、軒桁裏面に取り付き、化粧垂木・出桁と接している。

手挟末側は線形のみで簡素な意匠となっている。これは蛇内観音堂が広瀬中郷の人々に信仰された二間四方の小規模な観音堂であったためであろう。

④ 飯豊神社拝殿（嘉永5・1852年）図3.4参照

この拝殿は建立当初は飯豊愛宕堂とよばれた修験寺院のものであったが、明治維新の神仏分離政策によって飯豊神社拝殿に改称された。

手挟は向拝柱上の出三斗組物の実肘木上にあり、軒桁裏面に取り付き、化粧垂木と接している。手挟末側は牡丹の花・葉の意匠で、透かし丸彫すなわち籠彫となっている。

⑤ 鹿島神社拝殿（明治15・1882年）図3.5参照

この手挟は向拝柱上の出三斗組物の実肘木上にあり、軒桁裏面に取り付き、化粧垂木と接している。手挟末側は渦若葉の意匠となっている。

⑥ 熊倉神社拝殿（明治21・1888年）図3.6参照

この手挟は向拝柱上の出三斗組物の実肘木上にあり、軒桁裏面に取り付き、化粧垂木と接している。手挟末側は渦と波頭の意匠となっている。

次に横田氏が手掛けた建築作品にみられる持送絵様について詳細にみると以下のようなになる。

① 宝蔵寺客殿（安永9・1780年）図4.1参照

この持送は内外陣境虹梁下であり、内外陣境柱に差し込まれている。絵様は宝蔵寺拳鼻絵様と同様であり、下り巻き上げ木瓜渦と巻き上げ渦の意匠となっている。

② 湯沢神社本殿（寛政9・1797年）図4.2参照

この持送は縁葛受けの腕木下であり、身舎柱に取り付いている。絵様は渦文であり、上がり巻き上げ渦となっている。

③ 満福寺鐘楼（万延2・1861年）図4.3参照

この持送は隅木下であり、丸桁鼻入り隅に取り付いている。絵様は上がり巻き上げ渦文に若葉となっている。

④ 虻沢稲荷神社拝殿（明治31・1898年）図4.4参照



図 3.1 貝谷観音堂 (延享4・1747年)



図 3.4 飯豊神社拝殿 (嘉永5・1852年)

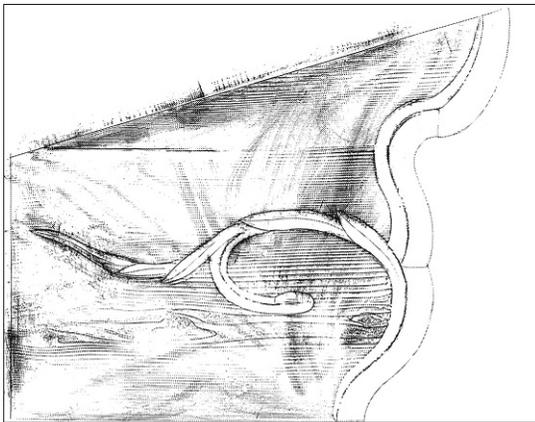


図 3.2 正学院浮金観音堂 (天保5・1814年)

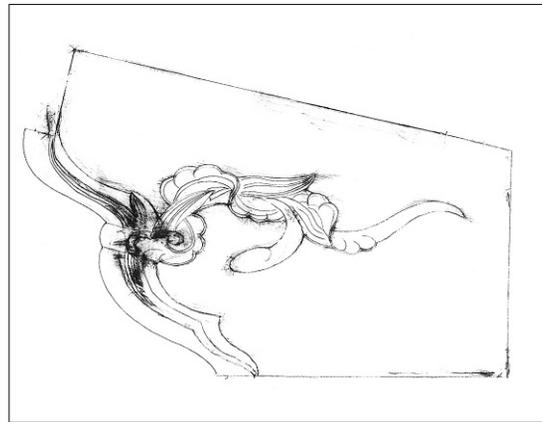


図 3.5 鹿島神社拝殿 (明治15・1882年)

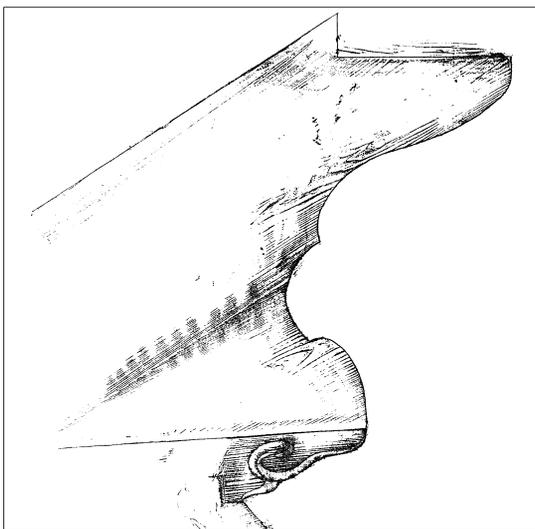


図 3.3 蛇内観音堂 (嘉永4・1851年)

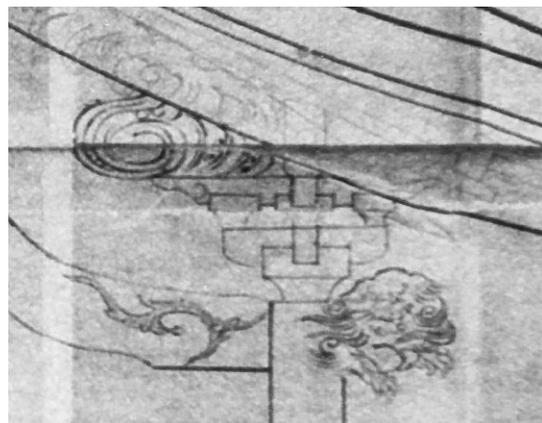


図 3.6 熊倉神社本殿 (明治21・1888年)

この持送は向拝水引虹梁下にある、向拝柱に差し込まれている。絵様は松の意匠であり、籠彫となっている。

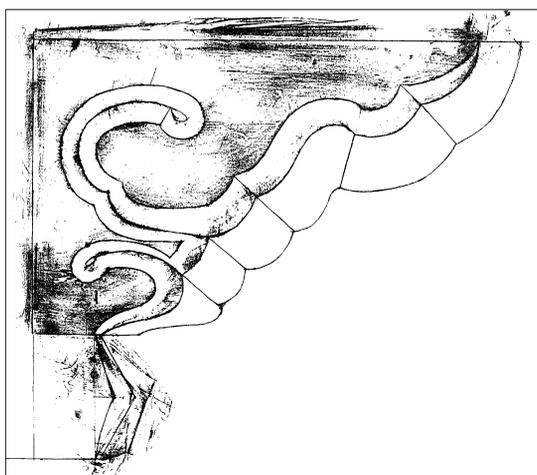


図 4.1 宝蔵寺客殿（安永 9・1780 年）

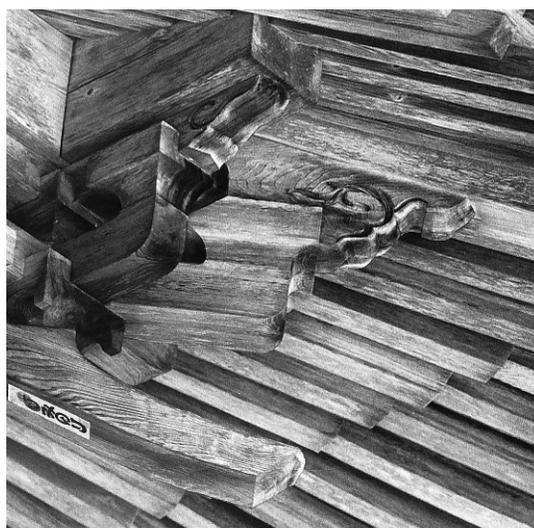


図 4.3 満福寺鐘楼（万延 2・1861 年）



図 4.2 湯沢神社本殿（寛政 9・1797 年）



図 4.4 蛸沢稲荷神社拝殿（明治 31・1898 年）

1.1 手挟絵様の変遷

横田氏の手挟絵様の変遷を手挟 6 例から明らかにすることは困難である。手挟絵様として、牡丹花葉、渦文若葉、線形、牡丹花葉（籠彫）、渦若葉、渦・波頭などがある。

1.2 横田氏の手挟と木割書における手挟との比較

木割書における手挟と比較すると、横田氏の手挟のうち牡丹の意匠はここに取り上げた木割書にはみられない。ただし『新刻大工雛形』（嘉永元・1848 年）には牡丹花葉の手挟がみられる。

浮金観音堂（天保 5・1834 年）の渦文若葉（図 3.2）、鹿島神社拝殿（明治 15・1882 年）の渦若葉（図 3.5）、熊倉神社本殿（明治 21・1888 年）の渦・波頭（図 3.6）は、『当世いろは絵様集』（天保 5・1834 年）の絵様（図 1.7、図 1.8）に類似している。ところで渦文若葉、渦若葉は『大和絵様集』（宝暦 13・1763 年）において虹梁絵様としてすで用いられ

ているから、横田氏が『当世いろは絵様集』を直接的に参照して手挟をデザインしたどうかはわからないが、何れかの木割書を参照していた可能性は否定できない。また蛇内観音堂の手挟は繰形であるが、あまり一般的でない独特な形態となっている。

2.1 持送絵様の変遷

横田氏の持送絵様の変遷を4例の持送から明らかにすることは困難である。持送絵様として、渦文、渦文若葉、松葉（籠彫）があり、蛭沢稻荷神社拝殿の水引虹梁下の松葉（籠彫）の持送以外は簡素な意匠となっている。

2.2 横田氏の持送と木割書における持送との比較

横田氏の持送の渦文絵様は、木割書における木鼻絵様と類似している。満福寺鐘楼（万延2・1861年）の持送（図4.3）は、『当世いろは絵様集』（天保5・1834年）の渦文若葉（図2.16）に類似している。また蛭沢稻荷神社拝殿（明治31・1898年）の水引虹梁下の松葉絵様（図4.4）は『彫工雛形』（文政10・1827年）の松葉（図2.10）の意匠と酷似する。このように横田氏特有の持送デザインはみられなかったといえよう。

IV 横田家大工文書にみる手挟・持送絵様

横田家大工文書における手挟絵様は4点、持送絵様は10点あるが、このうち文書に建物名が記入されていたことから名称が判明しているのは、手挟3点、持送1点である。ただし名称がわかる持送1点は「小野屋」であるが、おそらく住宅に用いられたものであることはわかるが、どの住宅であるかは特定することはできなかった。

横田氏の大工文書にみられる手挟・持送の残存数が少なく、絵様の変遷を把握することは困難である。

ところで横田氏が手掛けた実例との比較や絵様の全体的な変遷の傾向から、同書に見る手挟・持送絵様を時代順に並べたものが表4.1・2である。

図5.1は手挟元側に入八双が描かれ、末側は渦文若葉となっていて、貝谷観音堂（延享4・1747年）の入八双・牡丹（図3.1）の意匠に共通性がみられる。

図5.2～4は飯豊愛宕堂（飯豊神社拝殿）の手挟であり、3種類の絵様をスケッチしている。実際に使用されたデザインは図5.3と考えられる。

図6.1～9の持送は渦若葉であり、頭貫木鼻ではあるが子歙倉神社本殿（嘉永4・1851年）に用いられた絵様に類似していることから、おそらく19世紀中期に描かれたものであろう。

また図6.10の持送は渦・波頭であり、熊倉神社本殿（明治21・1888年）の手挟（図3.6）

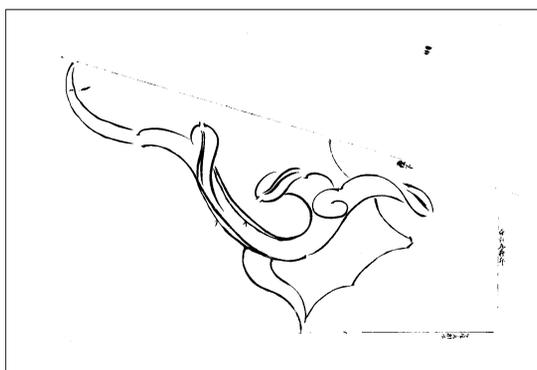


図 5.1

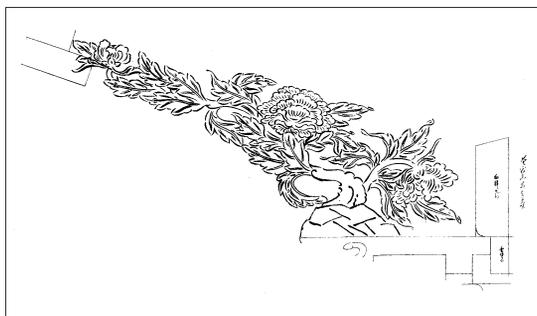


図 5.2 愛宕山（飯豊神社拝殿）



図 5.3 愛宕山（飯豊神社拝殿）

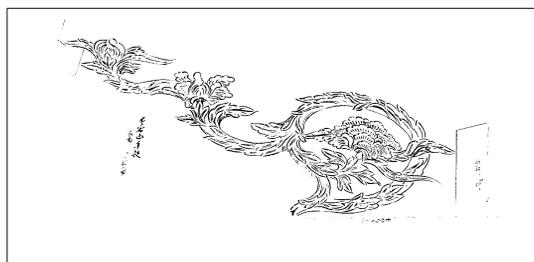


図 5.4 愛宕山（飯豊神社拝殿）

表 4.1 横田家大工文書にみる手挟絵様

No.	建 物 名	建 築 年 代	手 挟 絵 様	備 考
1	不明	18 世紀中期（推定）	入八双・渦文若葉	
2	飯豊神社拝殿	嘉永 5・1852 年	牡丹花葉	「愛宕山」の記あり
3	飯豊神社拝殿	嘉永 5・1852 年	牡丹花葉	「愛宕山」の記あり
4	飯豊神社拝殿	嘉永 5・1852 年	渦様牡丹花葉	「愛宕山」の記あり

表 4.2 横田家大工文書にみる持送絵様

No.	建 物 名	建 築 年 代	持送位置	持送絵様	備 考
1	不明	19 世紀中期（推定）	肘木下	渦若葉	子歛倉神社本殿絵様に類似
2	不明	同上	肘木下	渦若葉	同上
3	不明	同上	肘木下	渦若葉	同上
4	不明	同上	肘木下	渦若葉	同上
5	不明	同上	肘木下	渦若葉	同上
6	小野屋（住宅）	同上	肘木下	渦若葉	同上
7	不明	同上	肘木下	渦若葉	同上
8	不明	同上	肘木下	渦若葉	同上
9	不明	同上	肘木下	渦若葉	同上
10	不明	19 世紀後期（推定）	肘木下	渦・波頭	熊倉神社本殿絵様に類似

に用いられた絵様に類似していることから、おそらく 19 世紀後期に描かれたものであろう。



図 6.1

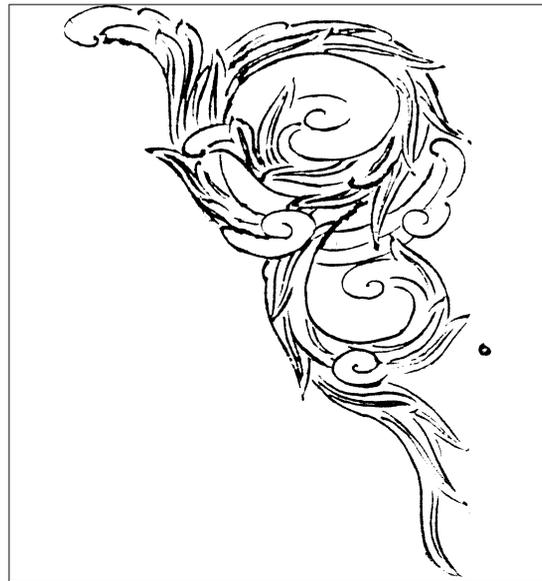


図 6.3



図 6.2

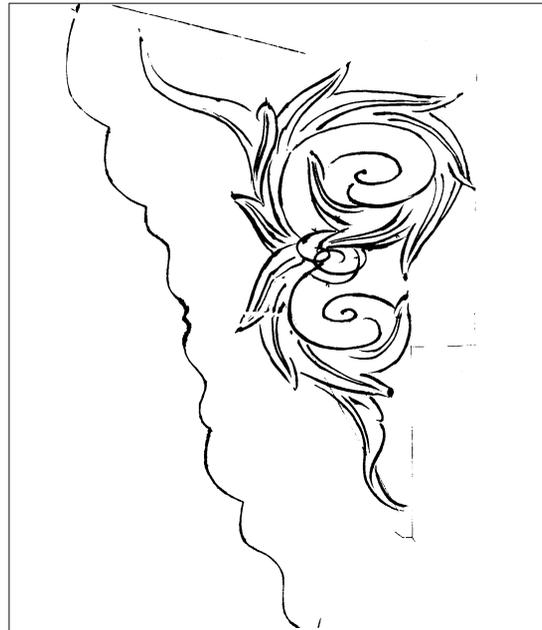


図 6.4



図 6.5 「肘木下持送り」



図 6.6 「持送り」

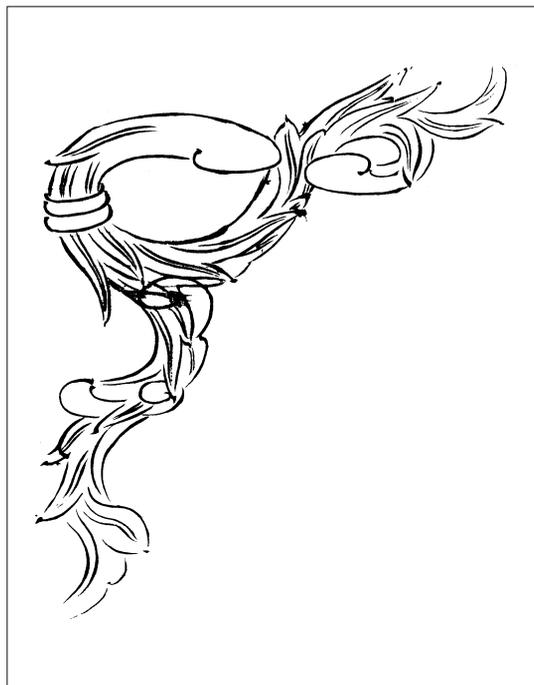


図 6.9



図 6.7

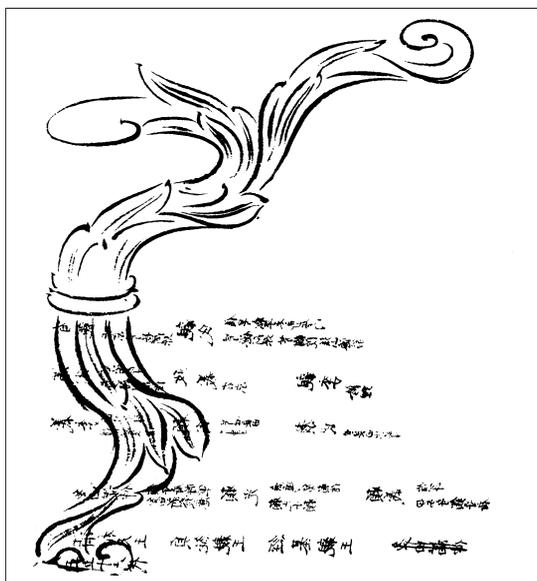


図 6.8



図 6.10

ところで横田氏が描いた渦若葉、渦・波頭のデザインは、『当世いろは絵様集』（天保5・1834年）の絵様、渦若葉（図2.16～18）、渦・波頭（図2.23）にそれぞれ類似していることに注目すれば、手挟・持送絵様においても横田氏独自のデザインはみられなかったといえよう。

V おわりに

これまでの考察を要約すると、以下のようになる。

- 1) 木割書における手挟・持送絵様の変遷は、資料数が少ないため明らかにすることは困難であるが、概観すれば、線形→渦文→渦文若葉→渦若葉、波頭、雲水（持送はさらに菊花、松、雲竜、波千鳥など）と変遷したと考えられる。
- 2) 横田氏が手掛けた手挟・持送と木割書における手挟・持送を比較すると、かなり類似していることがわかる。したがって直接的に模倣したかどうか明らかにできないが、間接的に木割書を参照した可能性を否定することはできない。
- 3) 横田家大工文書にみられる手挟・持送の資料数が少ないため、絵様の変遷を明らかにすることは困難であるが、横田氏が手掛けた手挟・持送との比較によって、各資料をおおよそ時代順にしたがって並べることができた。
- 4) 横田氏が用いた手挟・持送の絵様には、原則的には横田氏独自のデザインはみられなかったといえよう。

注記

- (1) 拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について 横田家大工文書の研究(4)」
共栄学園短期大学研究紀要、第15号、1999年3月
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について 横田家大工文書の研究(5)」
共栄学園短期大学研究紀要、第16号、2000年3月
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の臺股・笈形絵様について 横田家大工文書の研究(6)」
共栄学園短期大学研究紀要、第17号、2001年3月
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の懸魚絵様について 横田家大工文書の研究(7)」
共栄学園短期大学研究紀要、第18号、2002年3月
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の鬼板絵様について 横田家大工文書の研究(8)」
共栄学園短期大学研究紀要、第19号、2003年3月
- (2) 『匠家絵様集』『大工絵様雑工雛形』の鬼板絵様は麓和善編著『日本建築古典叢書第9巻』（大龍堂、1991年）から抜粋した。
- (3) 麓和善・鈴木規夫・岡本真理子・河田克博・内藤昌「木版本彫物書系絵様雛形の内

容的特質」(『建築史学』第14号、1990年3月) pp.89、pp.93